

# 表現力の育成のための効果的な指導の在り方について

高田純子

## はじめに

平成24年度から全面実施する予定となっている中学校新学習指導要領では改訂のポイントとして思考力・判断力・表現力等の育成が挙げられ、各教科等でレポート作成や論述を行うといった言語活動を指導上位置付けることが求められている。中学校外国語では「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことが目標とされている。中学校英語では授業時数が週3時間から週4時間へと改訂され、この時間を有効に使えば、今まで以上に基礎基本の定着を図り、それを土台としたコミュニケーション能力の基礎を養うという新学習指導要領の目標を達成させることができるのではないだろうか。本稿では表現力の育成のための効果的な指導の在り方について考えたい。

## 1. 主題設定の理由

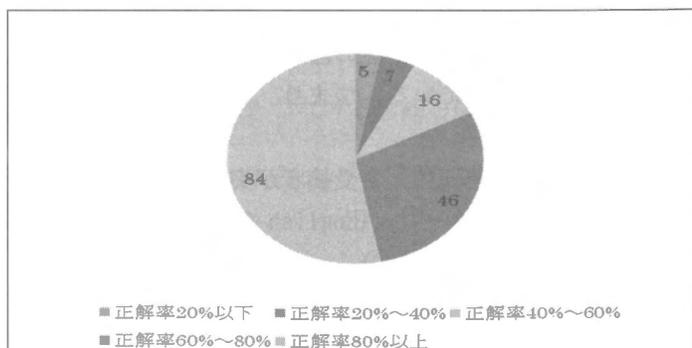
### (1) 「言語に関する知識」と「表現力」の実態調査より

本校の生徒は英語に興味を持ち、意欲的に言語習得に努めている生徒が多い。また、中学校入学前から英語に接する機会が全国平均よりも上回っていることも本校の特徴であるといえる。定期テストなどの文法問題や単語テストなどのペーパーテストでも高得点を取り、言語に関する知識を豊富に持っている生徒が多いといえる。しかし、その一方で自分の気持ちを既習の表現を用いて表現することができない場面に遭遇することがある。例えば、I want to be a doctor. とテストでは書けるのに、ALTにWhat do you want to be? と聞かれて、自分の言葉としてI want to be a doctor. と伝えることができないのである。また、単語を書くことができ、意味は分かっているのに、それを文の中で用いて自分のこととしてコミュニケーションができないこともよくある。

実践的コミュニケーション能力とは単に文法規則や語彙などの言語に関する知識を持っているだけではなく、それを用いて実際にコミュニケーションを図ることができる能力であると言える。言語に関する知識が土台となり、表現力が育成されることは言うまでもなく、この知識の習得をおろそかにしてはいけないが、この知識だけではコミュニケーションを図ることができないことも言うまでもない。つまり、学習したことを実際に使って、自分の考えや意見を伝える活動を行うなど、知識の域を超えた表現力の育成が必要となっている。そこでまず、「言語に関する知識」と「表現力」の習得の実態を調べた。(対象：1年生158人 平成19年 1学期期末テストより)

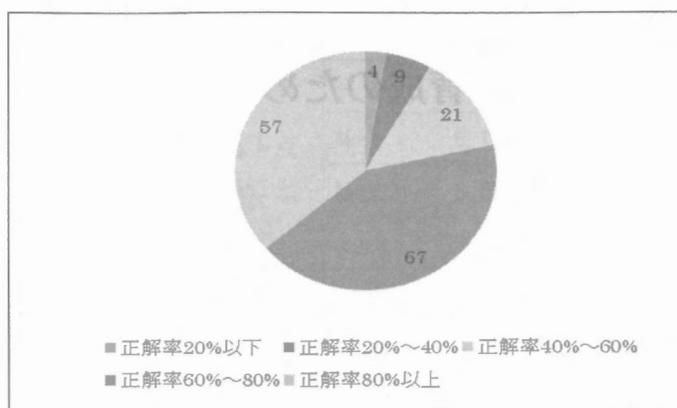
グラフ①

「言語に関する知識を問う  
問題の正解率」



## グラフ②

「表現力を問う問題の正解率」



グラフ①とグラフ②より、言語に関する知識を問う問題の正解率が表現力を問う問題の正解率より上回っていることが分かる。つまり、言語に関する知識は持っているが、それを用いて表現するところまでには至っていないのである。

## (2) 「理解力」の実態調査より

H20年1月に BenesseのGTEC for STUDENTS junior (リスニングテスト) で「聞くこと」(理解力) の把握のための調査を行った。

表① 「聞くこと」(理解力) — 本校と全国との比較

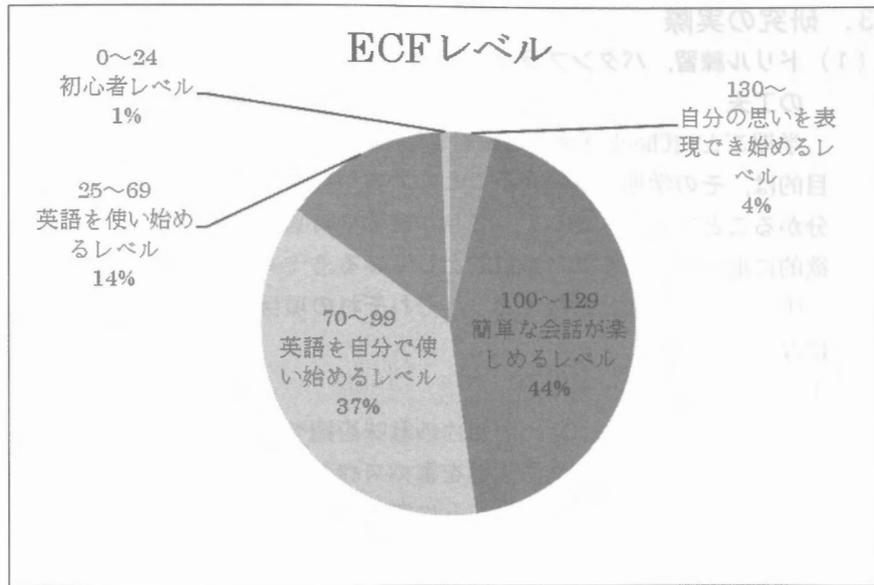
		本 校	全 国
受検人数		153	—
総合スコア	平 均	94.7	82.7
	(標準偏差)	(24.7)	(31.6)
英語の言葉を聞いてわかる	平 均	4.0	3.7
	(標準偏差)	(0.8)	(0.9)
英語の音を区別できる	平 均	4.5	4.3
	(標準偏差)	(0.8)	(0.9)
英語の質問に対する答えがわかる	平 均	4.7	4.4
	(標準偏差)	(0.6)	(1.0)
英語の長めの話聞いてわかる	平 均	4.7	4.3
	(標準偏差)	(0.6)	(0.9)

\* 「全国」 = 全国の同学年受検者の平均データ。直近3ヶ年の受検結果より集計

上表より、本校の生徒の理解力は全ての項目で全国を上回っており、ばらつきを表す標準偏差も低い値となっている。つまり、英語の会話や長めの話聞いて意味が分かる生徒の割合が多いと言える。

総合スコアを元に、各受検者が実際に英語を使って活動した場合、どのようなことができるのかを表すECFレベル (English Curriculum Frameworkに基づく英語コミュニケーション能力) を次に示す。(グラフ③)

グラフ③

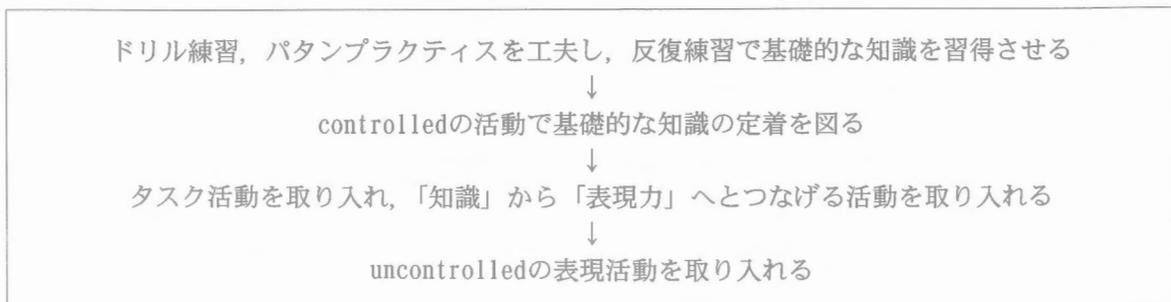


自分の思いを表現でき始めるレベルは4%，簡単な会話が楽しめるレベル44%，英語を自分で使い始めるレベル37%，英語を使い始めるレベル14%，初心者レベル1%という結果になった。

## 2. 研究の仮説

コミュニケーションを図るとき、自分が持っている言語に関する知識を用いて、相手の言っている（書いてある）内容を理解し、そして自分の思いを表現することが必要となる。つまり「言語に関する知識」「理解力」「表現力」そしてコミュニケーションを図ろうとする「意欲」、この4つの力をバランスよく育てていく必要がある。

ところが、「言語に関する知識」の域を出ていないコミュニケーション活動、すなわちコントロールされた言語活動を表現力の育成のための活動と取り違え、日々の授業実践の中で「知識」と「表現力」に偏りが出ているのではないだろうか。例えばインタビュー活動などをする際にワークシートに英文が書いてあり、生徒はその中から自分の聞きたい質問を選び、ワークシートに目を落としながらその英文を読む。これで相手にインタビューをし、コミュニケーションを図ったような気になっていることが教室で起こっていないだろうか。これでは身につけた基礎・基本の音声練習であり、実際の言語使用まで結びついていないのである。生徒が自ら思考し、判断して表現する段階に持つていくために「知識」から「表現力」へとつなげる活動を取り入れて4つの力のバランスをとる必要があるのではと考えた。そこで次の流れに重点を置いて表現力の育成のための指導を行えば、「表現力」の育成を図ることができるであろうと考えた。



### 3. 研究の実際

#### (1) ドリル練習、パンプラクティスを工夫し、反復練習で基礎的な知識を習得させるための指導の工夫

学期ごとにCheck Sheet (資料①) を配布し、ファイルの表紙に貼らせている。このシートの目的は、その学期で学習することの大まかな見通しを持たせることと自分の学習の軌跡が一目で分かることである。そして、ドリル練習や暗唱活動などの基礎基本の定着を図るための活動に意欲的に取り組ませることを目的としている。

①～⑧の項目に分かれており、それぞれの項目がクリアできればステッカーをもらえることになっている。

##### ① 予 習

ア 覚えたい語句 (新出語句) の意味を調べる

イ 基本文を書く (文法説明を書くスペースを空けておく)

ウ 教科書本文の英語をノートに写す

エ 本文の日本語訳を書く (予習の段階において、自分で考えてみることで読解の力につながると考える)

\* 英文の下に日本語訳を書いてしまうと見直す時に日本語訳にしか目が行かないので、日本語訳は英文から離れた所を書くようにしている。→復習するとき日本語訳を見ながら英文を書くなどの活動にも使うことができる

##### ② ドリル暗唱 (speaking)

教師や友達の前で基本文を暗唱する

\* 一度に5, 6文を口頭練習し、日本語を見ながら英文を暗唱する

##### ③ 本文暗唱 (speaking)

ア 教師の前で本文を暗唱する。

\* 1年生は教科書 (New Horizon) の本文を全て暗記することとしているが、2, 3年生はdialogとSpeaking Plusのみを暗唱することとしている

イ 対話文の場合はペアで暗唱する

\* 教師の前に来て初めて自分の暗唱する役が指名されるので、どの役でも暗唱できるように練習する必要がある。

このドリル暗唱や本文暗唱活動の前にパンプラクティスを工夫し、何度も何度も繰り返し練習する必要がある。「教師の指示は短く、生徒の声は多く」の視点からさまざまな方法で行っている。例えば、一語読み、立って3回、座って3回。黒板、窓の外、後ろ、廊下の方を見て一周まわって練習。Read and Look up。じゃんけんreadingなど全員参加を促すよう心がけている。自分の声と友達の声が交り、抵抗なく口頭練習ができ、自然に大きな声を出して練習している生徒も見られる。

##### ④ ドリル筆記テスト (writing)

ア 授業で覚えた基本文を次の授業でテストする

イ 全問正解すると手を挙げ、ステッカーをもらう

\* 全問正解しなかった生徒はCheck Sheetに点数を書き、何度でも挑戦できる。

##### ⑤ 単語テスト (writing)

ア ひとつのUnitが終わるたびに、そのUnitの語句を30問テストする

\*あらかじめ出題する30問は提示しておく

イ 全問正解すると手を挙げ、ステッカーをもらう

\*全問正解しなかった生徒はCheck Sheetに点数を書き、何度でも挑戦できる。

⑥ スピーチ (speaking)

ア 授業のはじめにテーマにそったスピーチをする

イ 友だちのスピーチを聞き、質問する。

⑦ その他のチェック

ア コミュニケーション活動やクイズなどで頑張ったときにステッカーをもらう

イ ノートが一冊終わったり、自主学习などの取り組みで頑張ったりしたときにステッカーをもらう

\*この項目のステッカーは出し惜しみをせず、生徒の意欲を喚起するためにもGood! Great! などと大げさにほめながらステッカーを渡す。

⑧ 確認

ア 学期の終わりに提出する

イ 学習の軌跡としてCheck Sheetを見ながら教師と面談を行う

このCheck Sheetを用いて、学習習慣も身に付き、意欲も喚起できたように感じている。この積み重ねで言語に関する「知識」をインプットすることができたのではないだろうか。

Check Sheet												
	Unit4 日本大好き			Multi	Speaking	Unit5 ピクニック			Words	Unit6 グリーン家の日々		
	1	2	3	自己紹介	忘れ物	1	2	3	曜日	1	2	3
予習												
練習												
その他												
	Speaking	Unit7 カナダの学校			Writing	Multi	Writing	Unit8 誕生日の日			代名詞	
	道案内	1	2	3	4	お誕生日	お誕生日	お誕生日	1	2	3	まとめ
予習												
練習												
その他												
	Unit4			Speaking	Unit5			Unit6				
	1	2	3	忘れ物	1	2	3	1	2	3		
ドリル												
ドリル												
	Unit7			Unit8			お誕生日の日					
	1	2	3	1	2	3	お誕生日の日	お誕生日の日	お誕生日の日			
ドリル												
ドリル												
スピーチ												

(2) controlledの活動で基礎的な知識の定着を図る指導の工夫

次は1で得た基礎・基本の「知識」をcontrolledの活動で定着を図る段階である。前述したように、このcontrolledの活動はコミュニケーション活動ではなく、あくまで「知識」の定着を図るための活動と考えている。

【controlledの活動実践例】

① 学習のねらい

一般動詞（一人称，二人称，三人称）の文を正しく発音し，文法に従い正確に対話することができる。

② 学習の流れ

・絵を見ながら疑問文の口頭練習をする

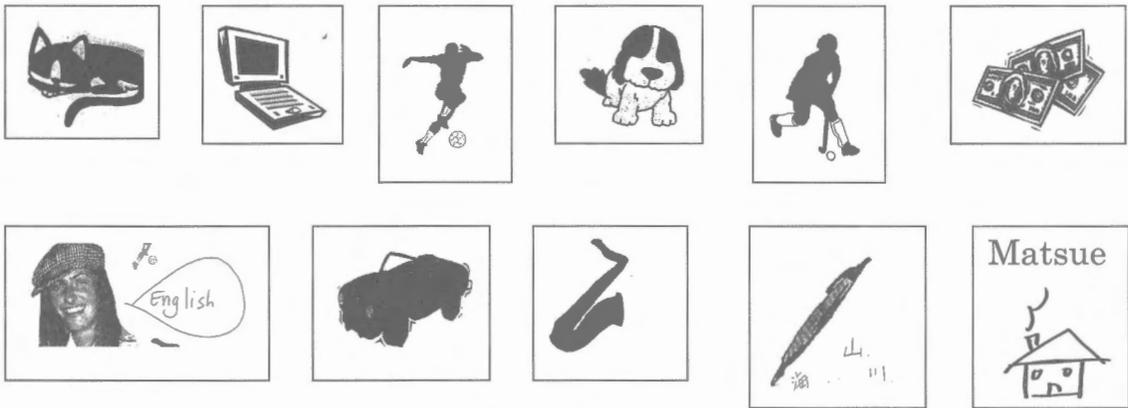
(例Do you speak English? — No, I don't. I don't speak English.)

- ・ 絵の中から聞きたい質問を選び、友達にインタビューする→インタビュー結果を英文でまとめる。
- ・ インタビューの結果を発表する

# Interview Game

Name ( )

男子1人、女子1人にそれぞれ違った質問を3つずつしましょう。(計6個) メモ欄 (Memo) のYes/Noに○をしましょう。(質問と絵を線で結びましょう) 質問し終わったら席に戻り、その結果を伝える英文を書きましょう。(例) ~は・・・が好きです



boy	くん	Yes / No	Yes / No	Yes / No
girl	さん	Yes / No	Yes / No	Yes / No

boy	
girl	

### (3) タスク活動を取り入れ、「知識」から「表現力」へとつなげる活動を取り入れた指導の工夫

タスク活動とは「言語知識を静的なものから動的なものへと変える触媒的なもの」であり、構造シラバスを基本として構成されている検定教科書を用いた指導を前提として、学習者が使用する言語形式を主体的に選択し、相手との自然なコミュニケーションを通して、与えられた課題を遂行する、原則として対話形式の活動や発表を指すものである。(高島英幸：実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導) とある。

そこで「知識」の域を出た「表現力」育成のための実践としてこのタスク活動を以下のように

取り入れた。

【「知識」から「表現力」へとつなげる活動実践例】

① 学習のねらい

- ・留学生は自分にあったルームメイトを見つけるため、コーディネーターは留学生にあったルームメイトを勧めるために、それぞれの持つ情報を伝え合い、ルームメイトを決定することができる。
- ・場面や内容に応じて、be動詞と一般動詞を用いて、自分や人のことについて述べることができる。

② 学習の流れ

- ・ペアになりコーディネーター役か留学生役かを決める
- ・シートの流れに従って、対話シタスクを解決する
- ・役を変わり、対話する

シートA (コーディネーター役)

《次の場面でペアと会話をしてみよう》

あなたはルームメイト紹介会社のコーディネーターです。ペア（留学生）がルームメイトを探しにあなたの会社へやって来ました。ペアにあったルームメイトを紹介できるといいですね。

- 1 笑顔であいさつしましょう。
- 2 ペアの情報を聞き出しましょう。(気の合う人を紹介するためです)
- 3 ペアの情報とあなたの会社に登録されている人のデータを照らし合わせて、ペアにお勧めのルームメイトの写真を見せながら紹介しましょう。
- 4 ペアも質問があるようです。(もっと詳しい情報は下にありますのでその情報をもとにペアの質問に答えましょう)



Bin



Ann



Mike



Lisa

(詳しいデータ) ひらがなを読む 姉妹はいない	(詳しいデータ) ひらがなを読む 姉妹が二人いる	(詳しいデータ) ひらがなを読まない 姉妹はいないが、 兄弟が一人いる	(詳しいデータ) ひらがなを読まない 姉妹はいない
-------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------

- 5 紹介した人が気に入ったかどうか聞いてみましょう。

シートA (コーディネーター役)

《次の場面でペアと会話をしてみよう》

あなたは自分にあったルームメイトを探しにルームメイト紹介会社を訪ねます。

- 1 笑顔であいさつし、自己紹介をしましょう。
- 2 コーディネーターの質問に答えましょう。(気の合う人を紹介するためです)
- 3 コーディネーターがルームメイトを紹介してくれます。
- 4 紹介された人について以下の2つの質問をしてみましょう。
 

Q 1 ひらがな (kana) を読むか?	Yes /	No
Q 2 姉妹が (sister) がいるか?	Yes /	No
- 5 紹介した人が気に入ったかどうか答えましょう。

紹介された人の名前 (カタカナでよい)

この活動では決められたことを表現するのではなく、自分の頭で考え、何をどのように伝えるのかを生徒は選択している。この思考が大切であると考えます。また、既習の表現と新出表現を交えて使うことで使用場面にも目を向けることができた。

(4) uncontrolledの表現活動を取り入れた指導の工夫

【uncontrolledの表現活動の実践例】 ALTと話をしよう

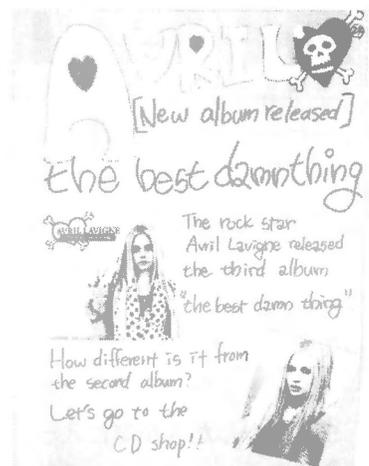
- ① 学習のねらい  
一般動詞を用いて間違いを恐れずに自分の伝えたいことや聞きたいこと伝え、ALTとの会話のやり取りを楽しむことができる。
- ② 学習の流れ 一人ずつALTと自分の家族やペットなどについて会話をする

この活動では三人称単数現在のSが抜けたりという文法的な間違いはあったものの、自分の言いたいことを伝えることができ、また聞くことができる質問ではなく、聞きたい質問をすることができたという生徒の満足感も得られた。活動後の振り返りでは「こんな時にはどのように表現すればいいのか」という質問も飛び交い、教師のコントロール下ではない活動につなげることができた。

以上は一般動詞に絞って実践例をあげてみた。その他にもuncontrolledの活動として次のような実践も試みた。

ア Poster作成オーディション (書くこと)

この活動では友達に伝えたい情報をポスターにして表現してみた。内容も自分で決めて、表現方法も自由とした。



生徒の振り返りより

- ・ポスターとなると豊富な単語や文を使って、読んでいる人のイメージを大きく膨らませないといけなかったので大変だった。
- ・自分の言いたかったことはだいたい言うことができた。でも「ここでしか見ることができないお宝映像が盛りだくさん!!」という文の「お宝」の部分を上手く表現できず、ただの"picture"で終わってしまったのが残念だった。
- ・分からないことは辞書を使って調べ、それを新しい単語として覚えることができた→自分の書きたいことを書けることがうれしかった。
- ・吹奏楽祭ではいろんな音を聞くことができるので、いろんな形容詞を使ってそれを表現した。
- ・自分の言いたい日本語をそのまま英語に訳すのではなく、何が言いたいのかを考えて伝えたいことを書けたから良かった。
- ・ポスターを書いてみて、自分の思ったことを書くのはとても難しいと感じた。でも何とかやり遂げた後はとても気持ちが良かった。

イ 紙芝居 Reading PlusのMagic Boxの結末を自分たちで考えてスキットを作り、発表する。  
(話すこと)



生徒の振り返りより

- ・緊張して役になりきれず、表現できなかった
- ・みんなの発表を聞いて、すごく発音のいい人がたくさんいたので、その人たちを見習ってどんどん表現力を上げ、文章、発音ともに力をつけたい
- ・練習ではもっと役になれていたのに、棒読みになってしまったので、そこの表現をもっときちんとできたら良かった
- ・どうしたらその場の雰囲気が表現できるのか苦労した。
- ・前を向いたとき、こっちを向いてくれてやりがいがあった。見てくれている人がいると表現もしやすかった。
- ・wife訳をやってみて、役になりきれるようにスピードや抑揚に気をつけて発表できた。
- ・後半のストーリーはどうしてもハッピーエンドにしたかったので、英語でしっかりそういう展開で終わらせることができて良かった。
- ・英語を覚えることによって自分のものになるような気がした。

#### 4. 研究の成果と今後の課題

uncontrolledの活動において「こんな時にはどのように表現すればいいのか」という質問が多く出た。具体的な場面を意識して、生徒が使用したい表現を使用したいときに使用すると、それは生徒の記憶にも残り、次に使用しようとしたときに記憶から引き出すことができるのではないだろうか。その意味でもこのような「こんな時にはどのように表現すればいいのか」と感じさせることができる具体的な使用場面を意識したuncontrolledの活動を積み重ねていくことで「表現力」の育成も可能となると感じた。

uncontrolledの活動でコミュニケーションを図るとき、自分の言いたい日本語をそのまま英語に直して伝えようとして、自分の知らない単語や表現の仕方にとらわれすぎてしまい、表現できない場面が多く見られた。英語と日本語を1対1で考えるのではなく、自分は何が言いたいのかを考えて、知っている別の表現を用いる柔軟性が必要であるとも感じた。それもやはり英作の「知識」の域を出ていないからと言える。このような柔軟性も「知識」を「表現力」へとつなげる活動を多く取り入れることで育成できると感じた。今後の課題として、さらに「知識」から「表現力」へとつなげる活動を取り入れ、それをuncontrolledの表現活動へと結びつけるような言語活動を多く取り入れていきたい。そしてその活動の中で、前述の柔軟性を養い、実際のコミュニケーション場面をシュミレーションし、言語使用につなげていけたらと思う。

#### 参 考 文 献

- ・斎藤栄二(2008),『自己表現力をつける英語の授業 How to Let Students Express Their Ideas』三省堂
- ・高島英幸(2000),『実践的コミュニケーション能力のための 英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
- ・高島英幸(2005),『文法項目別 英語のタスク活動とタスク 34の実践と評価』大修館書店

(たかた じゅんこ 英語科 j.takata@edu.shimane-u.ac.jp)